

# 紹介・白杵市文化財管理センター蔵 『長崎道中日記』(二)

徳 岡 涼

湯屋村 茶や

瀬戸か迫と申所、北の関に出店等有之候得共、駅場にて無之。南関には大に劣れり。北関出口に柳川より四里之棒木建之。左に亀尻村を見る。

三ツ峰 茶や四五軒

是より式丁行。

中原村 店式軒

同三丁程行。

まで川 店十軒斗。

左に上はへ村を見、三丁程行。

原ノ町 南関より式里

宿内十丁も可有之。右側人馬会所有之。

日出川 店四五軒。

右に赤山村を見、左は打開たる津留也。

野町

此町長七八丁も可有之。町中に柳川より、三里之石建之。(22裏)

右清水寺

左柳川 追分

此清水寺観音は京都清水の元にして京都は筑後の移しなる由、右野町迦れより式三丁行。

清水 茶や五六軒有。

此所より両方共広き津留也。都て佐賀迄は山なし。

松のぶ村

吉井町

此所より三丁斗行。

月もふす 店有。

此所より清水寺道追分有。

清水寺へ野町の追分より一里、夫より登り十六丁瀬高へ一里半の廻りといふ。

柳川領は、道幅狭く式間位土手もひきく、両側小杉、しづくひに植。

柳川 三斗三升上納俵

三斗五升常俵」(23表)

瀬高宿 原町より式里

宿内左に、三池への追分あり。此所より三里、七合位之由。

柳川立花侯御分地。

一万石、筑後三池領主、立花豊前守種善、文化三寅年、奥州伊達郡下手渡へ所替、一万石。跡の三池は御料所と成。

此宿内、長廿丁余有之。人馬継所、右側宿中央に川有。瀬高川といふ。橋長三十間余、川中に馬建有之。此川より西を上庄といふ。東を下の庄といふ。双方に七町宛有之由、メ拾四町にて千軒

所の由、宿迦一丁程手前に、

従是北 宿町通

従是西 柳川通 追分石

右宿迦より、久留米・高良山、丑寅方、遙に見ゆる。

此分、先書の写、此節通行せず。

鬼橋 (店十軒斗／此所より、柳川へ壹里。) 一 (23裏)

此辺より石を焼、匂ひ至て悪し。とち石といふて、三池より出る由也。是より八丁程行。

三ツ橋 店拾軒斗。是より八丁程行。

かまふな 店式軒

柳川入口三四丁手前、右高畑村神明宮有之、山門迄、桜馬場、手前板橋、藤の棚等有之。至て奇麗成所也。此神明宮は、近年、立花侯御先祖、戸次丹後守入道、立花道雪侯を勧請の社也。道雪侯は大友三老の一人也。三柱大明神と号。

柳河城下 瀬高より式里

筑後国大門郡柳河城主、立花左近将監侯御

城下、御高十一万九千六百石。  
大広間 江戸 二百九十里余。

入口、瀬高御門より入。新町・細工町・瀬高町・本町より魚売場に出。大手御門は引入有之。御門前、板橋也。待小路一見は不相成。」(24表) 本町の内、中町祇園社前にて人足繼。夫より井手橋御門を出。橋を渡。

右久留米

左小保 〈追分石有之。／是より久留米

五里。〉

右久留米外町と申所へ立寄、荷馬繼、猶又小保道に立戻り、船津町通り、当所はぜの名物。

一、当所海辺にて、繁栄の所なり。町屋杯至て奇麗に有之。尤、長崎へ船にて参候得は一日に着いたし候由。

一、右細工町にて、町人の内、門構大造に相見候付、名前相尋候所、中井七兵衛と申す豪富の由。尚又、瀬高町にて同断相尋候所、石本平兵衛と申者の由。此者は根元肥後国天草の者の由、近年当所に致普請候。

柳河船津所出口番所有。二三丁行。

三軒茶屋 五六軒有

暫行川中に」(24裏)

従是北 柳河領之木

道傍に

従是南 久留米領之木

久留米領

一つ家 店五六軒

畑甫 同断

店の中央に

右に、柳河より一里之棒木

左に、従是西久留米領之石建

津村 店五六軒

堤

榎津 店数々

此所行当り、久留米高札之下に、

右に、久留米より五里十九丁石建

左に、久留米領・柳河領 堺石

小保 柳川より式里」(25表)

撰津より家居引続有之。此辺は柳河・久留米、両領入交也。

此所より船橋迄は十丁有之。馬は柳河より船場へ通し候得共、人足は小保にて継候事。

右に久留米領。若津と申所見ゆる。此辺は、筑後の津にて繁華の場所と見ゆ。

新地

船場 柳河之番所有。

此所、渡賃壹人前、廿四文。

馬荷、両懸駕等、別段渡賃出る。川向、

肥前、佐賀、領番所有。

人馬は先令差出、有之候得は、寺井より

船場へ人馬差出相待也。

此渡は、肥前筑後の堺、此川は豊後日田より流れ出たる筑後川の末也。筑後川は一夜

川ともいふ。名所方角抄に見へたり。此渡

より肥前温泉嶽、申の方。」(25裏)

寺井 小保より壹里

宿内七八丁も可有之。渡場より宿口迄、

二三丁位。

水町

光上<sup>みつのかへ</sup> みつのへと云。

益田

江賀江町

佐嘉城下 寺井より式里

┌ (26表)

└ (26裏)

瀬高宿中より右手に取、小杉の土手道伝ひに府中道に入。

尤筑後国高良山・水天宮参詣の望あるかゆへに、柳河通りの先触を差出置といへとも、此所より別れ道に入。

本郷村

〈従是南 柳河領／従是北 久留米領〉堺石建

小嶋村

上町村

羽<sup>ハ</sup>犬塚<sup>イヌヅカ</sup>

此所より〈府中へ三里／久留米へ三里〉

此宿、一昨年と当春と両度引続ての火災有之由。此所へ午刻着。人馬は久留米城下へ継立、両士

は直に米府へ通行し、「(27表)我輩三人は、高良山へ参詣す。

一条村

此所、左右池数々あり。

あいご 〈羽犬塚より一里三丁／府中へ一里七丁〉

此所に、〈右府中道／左久留米道〉追分石建

桜尾 府中へ一里

二軒茶屋

大根川橋

府中宿 〈羽犬塚より三里／久留米へ壹里〉

此宿内、右手高良山也。高良本社の右手に愛宕権

現あり。

愛宕権現 〈石壇式百壇も有べし。余程高し。〉

当社の裏道より次第登り、高良の本社に出る。」

(27裏)

高良山玉垂宮 〈府中より／登り十八丁〉

祭神 武内宿禰

一の石華表

唐銅古風立額 玉垂宮

御池ありて、中に石橋架る。

右手に登り坂左右、神主社僧の坊舎余多有。

左手に高良山御井寺・蓮台院 権大僧正。

寺より上に東照大権現安置。

御朱印と有馬侯よりの社領と合して千石。

御井寺は、筑後国御井郡久留米ゆへ、此名あり

と思ふ。

神門 拜殿、檜皮葺、画天井

本社 南向、檜皮葺、御紋三ツ巴、減金。至て奇

麗なる宮殿也。」(28表)

絵馬堂

本社の横より渡口の山手、躑躅夥敷植たれば、花

盛の時、思ひやらる。

当社頭より遠見すれば、向に肥前国雲仙嶽見へて、

天草の嶋々、肥後・筑後の海面近くは筑後川とい

ふ大河流れて、其傍に久留米の御城見へ、又、南

の海辺には柳川の大河見へて、柳河の御城、筑後

国一円、一と目にて、折しも菜種の花盛なれば、

眺望殊の外宜し。

一の鳥居より下りて、宿内往来を横切に久留米海

道あり。

直に西に行は、佐賀往來に出べし。

三本松町 松屋清助宅泊

人馬会所は、右近川二丁目にあり。

「(29表)

久留米城下 府中より一里

筑後国御井郡久留米城主、有馬中務大輔侯、御城

下、御高二十一万石。

大広間 江戸より二百九十二里余「(28裏)

入口、登城下の見付に五穀神社見へ候

五穀神社 (久留米城下、高良山よりの入口也。)

華表は南向 石鳥居

池ありて中に石橋架る。

本社拜殿 東向

惣赤塗

社僧は、神田山シタサン

円通寺 真言宗

十丁目御門ともいふ。

五穀神社を出ると、直に久留米東御門に入。本町

通りにして十丁目より一丁目に出、札の辻ありて、

廻ると御城の堀際を通り、高札場あり。町家至て

繁昌せり。高札場見通し出れば、両士へも出会共

々。

一、久留米は、地域にして天守なし。櫓台斗り。

一、城下火の見櫓あり。又一丁目毎に、火の見ありといふ。

一、久留米城下の客館は広くして、家造、大造にして立派也。九州第一の客館と聞。

一、久留米領分、一向宗東派斗り。西派は一ヶ寺も無

之由。有馬侯御先祖江府殿中にて、御間違ひの由。

西本願寺上人被申候より子細有之、西派末寺を不殘

東派に改替させし由承る。

一、御菩提所は丸之内 禅宗 梅林寺。

一、浄土宗鎮西派 善導寺は、府中より一里半。

一、久留米より、柳河へ五里、佐賀へ七里。太宰府へ

七里。吉井へ七里。海辺船着へも、六七里ありとい

ふ。

一、筑後普化宗 出張所林樓軒は、吉井と申所にて、

久留米より七里、日田の方也。

一、廿九日 (晴)に成。雪風にてつめたし。夕方西

「(29裏)

一、廿九日 (晴)に成。雪風にてつめたし。夕方西

「(29裏)

風強く、寒気増。)。

卯刻過、久留米出立。少し行と直に瀬の下に出る。

水天宮 尼御前ともいふ。

瀬の下に鎮座。筑後川の流に添て、宮居いと清淨なる社地也。

大鳥居石 カラカネ 銅額 水天宮

鳥居都合四ツ

拝殿瓦葺

本社 未申向

檜皮葺 椿の花の御紋

当社、其むかし、源平合戦の時、平家は此西国に落候比、二位の尼御前、下の関の海に身を投沈しが、其尼の懐剣、終に、此筑後川の末に流れ着たるを取上て、当社の神体と崇祭しゆへ、尼御前の名ありといふ。毎年正月元日大宮司瀬の下川の半に行、水にて神体の宝剣を「(30表)す、き清め、其水にて御守の梵字を紙に摺て、御守護となしけるよし。其時、千枚宛を一度に押し悉下迄通る事とぞ。

右手に川を向て

大宮司 牧和泉守

家居も立派にして、書院并物見等ありて、筑後川眺望よし。

御祭礼は、例年四月朔日より賑はひて、五日御祭日御守は一枚十二附。

両郭と思ひしに唯一の宮居也。

筑後川

一名千歳川トセといふ。筑後第一の大河なれば、筑後川ともいふ。水天宮の宮居の辺を瀬の下といふゆへ、瀬の下川ともいふ。水上は遠く肥後国阿蘇・豊後国日田より流れ候ゆへ、当所より日田迄も川船登りける由。

此川下、久留米より二里下かにかべと申所、三千年前、家中川中堺にて、雁を打し事より起り、佐嘉侯、久留米侯、堺論起り、数十年確執となりたりしが、「(30裏)

京都より、宮様家御下向、御取暖にて、事穩に済ける由承。

川中国境

領分境

東南 筑後国 久留米領

西北 肥前国 佐嘉領

此川より遠見、北に宰府の宝満山、昨夜、雪に真白に見へ、山つ、きにひや水峠とて、九州大名の越しける峯より、田代山、波濤のこたく見ゆ。瀬の下より肥前豆津、真向に船わたしなり。

豆津 久留米より一里半。久留米城下より至て近く半道也。川一里に立といふ渡り上りに、大木戸、佐嘉侯の番所あり。此所にて人馬継。

ちりく村

ちりく八幡宮、当国一ノ宮、大社也。

道より右手に、小高く宮居あり。

松本

白壁

西尾

中筑摩

下毛

坊所

中津江

こけの

┌ (31表)

是より筑前より肥前佐嘉への本街道、田代通りの往来に出る。

よしだ

田手村

右に太神宮勧請、佐嘉侯御紋付。

地藏町

神崎

豆津より三里

昔は此所に城有し也。家員多し。

櫛田宮

角を打廻して、大鳥居建。

額 櫛山 櫛田宮

祭神稲田姫命 宮居広く至て大社也。先年は、

社領も千石有之。当時、三十五石の社領の由。」

(31裏)

新宿

原の町宿 神崎より一里半

本名塚原といふ。

高尾の宿

是より左手に、佐賀御分家蓮の池、御陣屋、海辺



にありといふ。  
蓮池城下 ハスイケ 佐嘉より壱里半

肥前国佐嘉郡蓮の池領主鍋島甲斐守侯御陣屋あり。御高七万三千六百石余、(\*傍線箇所貼り紙により「五万二千」とす)

柳間 江戸より三百十三里

又、右手に佐嘉御分家小城ヲギの御陣屋、山手にありといふ。

小城城下 ヲギ 佐嘉より三里

肥前国小城郡小城領主、鍋島加賀守侯御陣屋あり。御高七万三千二百五十石余。

柳間 江戸より三百十三里 (32表)

佐嘉城下手前にて、筑前太守松平美濃守侯御嫡子松平下野守慶賛侯、長崎より福岡城へ御帰りの行列拝見、比しも未の半刻にて巳前刻より、御先供追て続く。

大殿 美濃守様(御年四十四五)薩州侯より御養子に御入)

若殿 下野守様(御年十七)伊勢津藤堂侯より御養子御入)

大殿、御病身に付、此節長崎御台場を若殿へ御引渡之由にて、御父子二月下旬、長崎へ御出。塚崎迄御一所。塚崎より、大殿は唐津手前通り、福岡へ御帰り、若殿は佐賀田代通り、福岡へ御同日に御帰りの由。今朝、塚崎御立、牛津御着。神崎御泊之筈。

御家老 七千石 野村隼人

年齢六十斗の人、此野村氏は、後藤又兵衛尉基次の末孫にして、福岡の名家也。家の紋 割はさみ

持鎗 白摘毛あいくに黒見へる。二本道具 (32裏)

御用人 三千石 浦上帯刀

其外大宮主 ツカサ 吉富孝大夫 此何某杯惣人数七百人。又、大殿御供も七百人余といふ。

凡、家中身の廻り、駕道具に至る迄殊の外、立派のいでたち也。

御父子千五百人御供也。唐津通より、佐嘉通りは、三里遠き由。三月朔日、同日に御帰城也。

佐嘉城下 原の町より一里半

肥前国佐嘉郡佐嘉城主松平肥前守侯、御城下にして、御高三十五万七千石余。

大広間 江戸より式百九十里。

入口番所あり。町一筋町にて、長巻里半も可有之。

町家家居宜。侍小路は、旅人入込候義不相成。御

城は地城に付、一向不相見。

人馬継所、二ヶ所に有之。長崎へ行懸は、元町と

申所へ継。┌(33表)

一、佐嘉御城は、昔の龍造寺隆信の居城にして、龍造

寺廢して、家臣鍋嶋村より出たる鍋嶋平右衛門尉居

城して、佐嘉城と相改。居城は近年迄、隆信靈蹟て

怪異あるかゆへに、佐嘉城下より式里、黒土原と申

所に龍造寺隆信を祭りて、敷山の社大神宮と号す。

一、佐嘉侯、御紋は魚容也。又、御番所くくの幕の紋

は丸に劔、カタバミ酸草也。

一、鍋島村は城下より式里。

一、御菩提所は、禪宗 高伝寺。

一、佐嘉城下より一里行と本庄川とて海辺に出るゆへ、

佐賀は魚類沢山也。

一、佐嘉天守は、百年前焼失して、只今は、櫓台斗といふ。

一、龍造寺隆信の末葉、村田若狭とて、御客分として

八千石知行、被宛行候て、古主の家を御立被成候由。

一、当太守松平肥前守齊正侯、当年四十一才、格別武

道御引立の由。┌(33裏)

一、当城下。精町は、儒者古賀弥助、精里先生の出た

る所也。精町産の人ゆへ、精里の号あり。其子古賀

東馬、其孫古賀大一といふ。

一、佐賀より海手、本庄と申船着には、道法僅七合位

あり。此所より諫早へ夜中、押船にて海上七里也。

諫早は一萬石の城下也。

一、鍋島の御三家といふは、佐賀より道法

七万石ヲギ小城、五万石ハスイケ蓮池、二万石カシマ鹿島

(三里) (一里半) (九里)

一、去嘉永六丑冬、大公義より、佐賀侯は長崎御台場

御引受ゆへ、常に石火矢の鑄物師多く、御抱之事に

付、(\*欠字) 公義より佐賀侯へ、此節御頼にて、石

火矢式百挺鑄立被仰付、金物は、大坂より御下しの

由、十五貫目より五貫目迄、筒の重さ式万斤、穴さ

しわたし壹尺三寸斗り、三ヶ年に鑄立。江戸登せ、

被仰付、又、佐嘉侯よりも、百挺石火矢鑄立、都合、三ヶ年に三百挺の鑄立に相成。城下口にて場所を構へ、是を鑄る。」(34表) 皆鉄にて鑄。穴は水車にてよく。凡、廿五人持にて、船場へ出す。尤、筒の大小によつて、人夫は相違有之由。

一、佐嘉城下、月に三度七の日毎に、石火矢稽古打有之由。兼て前日城下中へ触流しありて、明日、石火矢打に付、用心して、ひつくりするな、棚のものおろし置とて、相令置候よし、実に仰山なる間にて、有之由。所の人の物語りなり。

一、佐嘉領 御高札認方

御高札之趣  
領内之輩堅可  
相守之者也  
肥前(花押)

一、佐賀侯よりは、国札を不出。米切手と申ものを、下方有徳の者より、差出候て是を 国中の通用とす。」(34裏)

或 早津井(ついで) 井手善兵衛

丑十一月より寅十月廿九日限り

など認て、領内最寄りの富家の用達振切手を以て国中通用にて、決して上よりの願切手と申は無之事。又、佐賀領に限りて、他札通用を禁ず。別して久留米の切手などは、鳥渡も不受取。されとも佐賀の米切手をは隣国も内証通用し、久留米も受取。其上、長崎迄も内証通用出来候由也。

一、佐嘉城下は、町屋軒別店先に、西の宮と申て、恵美寿の小さき石像を建。不審に存、尋し所、商神の由にて、家毎に安置せり。高三尺斗り、多く戎の鯛を抱石像、間には、大黒の石像、又西宮社と彫たるもあり。一ヶ所石敢当と彫たるあり、珍し。此石像、佐嘉城下斗りにて他国に無之事也。

一、佐嘉城下火之見槽、三ヶ所あり。

一、肥前焼物、十七八ヶ所あり。有田焼を第一とす。

伊万里・唐津等也。」(35表)

日峰大明神(ひらね) 宿内左手にあり。

佐嘉侯御先祖、鍋島加賀守直茂侯の神号にて祭る。

祭日(六月三日) / 三月十三日)

石大鳥居  
木屋根付鳥居

池 石橋 社前殊之外広し。

本社 東向 銅葺

額 昭明殿

絵馬 高砂尉と姥松、千羽鶴。至て見事

肥前侍従藤原直直

御紋付 御領内 有田焼焼物灯籠一基

焼物のとふろふは珍し。

高さ六尺斗り。

御社前両側石灯籠 八対

鍋嶋御三家より奉納、姓名あり。

唐銅大鳥居 奉獻神門一基

博多住人鑄之。」(35裏)

白山八幡宮 宿内左手にあり。

大社にして先領主龍造寺家の建立也。龍造寺八

幡といふ。

太神宮 同断

一、佐嘉より久留米に行には、神崎迄三里。同所より

久留米へ四里。メ七里之道法也。筑前博多へ行には、

原の町へ壹里半、同所より神崎へ壹里半、神崎より

中原へ貳里。中原より轟へ貳里。轟より田代<sup>タジロ</sup>へ壹里

半。田代より原田へ貳里。原田より二日市へ貳里。

二日市より博多へ五里。メ拾七里也。

佐賀城下を出て

後 かせ川 板橋(長四十五間/巾三間) 手摺付

前 かせの町

此所俊寛僧都の古跡法勝寺と」(36表) いふ寺あり。

徳間町

左側に佐賀領分第一の富家あり。

鶴丸 酒井清在衛門 丸に葛紋

酒・質・田畑多く所持の由。

香椎宮 出迦れ左側にあり。

久保田宿

此間 佐嘉郡 小城郡 堺石立

牛津<sup>小城領</sup> 佐嘉より貳里九丁

暮過に着

本町左側 伊勢屋忠右衛門宅泊

宿内右側人馬継所あり。

一、晦日 曇 無波日和

卯刻過平津出立

牛津新町 橋

戸川の町

戸川の宿 新宿と唱ふ。」(36裏)

戸川の寺町

八幡町

菰原宿 かもはらともいふ

此所に小城郡杵島郡堺石

暫行は、右に長式丁余之大堤あり。

といや

〈従是東 佐嘉郡／従是西 杵島郡〉堺石建

佐留志

山の口

麻鍋の宿 農家斗五六軒

小田 佐嘉領 牛津より式里三丁

寺口

大町

村中右には八幡宮社。此所より塚崎迄追々茶  
や有之。

福母村

村入口八幡社石壇高し。」(37表)

焼米

入口土橋あり。右に大堤数々あり。龍王社あり。

又、二重堤とて、大造の大堤あり。凡て此辺大  
堤多し。

右竹尾新道也。

追分

道

左塩田昔道也。

右竹尾といふは、塚崎の事也。本名塚崎に候共、  
当国にて本名を唱候もの少し。何も竹尾と唱ふ。

右塩田道の方至て宜敷、長崎へ行くには、右塩

田道より成瀬・嬉野と参り候へは、沓里近く、

其上道も宜し。

成瀬〈小田より／式里十丁〉塩田〈成瀬より

／式里〉嬉野〈塩田より／式里〉メ六里拾丁

程也。

塚崎通りは、七里余有之。

右塩田道は、塩田より鹿島・諫早への往還の由。  
此分先書の写、此筋通行せず。

是より北方塚崎通りは、新関道也。

志久村」(37裏)

宮有 近所茶や三四軒

至て奇麗也。

北方の宿 小田より式里

宿内五丁位、此宿、止宿等は、恰好不宜。

高橋 北方より十丁

此所庄屋数々繁花也。

甘久村 店式カ所一二軒宛

追分 (右佐嘉/左唐津) 道

安す波

塚崎 北方より壹里十三丁

烧米の追分より左に入。昔道也。

新橋 土橋也

此橋の本に船着にて、佐賀より諫早への間、内海より潮入。」(38表)

成瀬 蓮の池領(小田より式里十三丁/塩田へ二り

一丁/嬉野へ四り半)

成瀬より右に朝鮮山とてもみ立たる異形の山あり。峰に虚空蔵あり。其向の麓塚崎の宿なる由。

龜山村

肥前焼物 瓶焼所

しだの西山 東山

皿・茶碗焼所。土は天草より取寄候由。

蛇松

下熊

塩田<sup>シホダ</sup> 蓮の池領 成瀬より式里

宿内へ入と右、浄土宗本能寺立派の寺也。宿内裏

は入海にして、肥前焼物瓶等積込、四五十石の船

数々着。」(38裏)

鹿島城下(佐嘉より九里/塩田より鹿嶋陣屋浜辺へ

一里半。)

肥前藤津郡鹿島領主鍋嶋丹波守侯御陣屋あり。御

高二万石

柳間 江戸より三百四十七里

美濃川 板橋

敷並川 飛石渡り

追分 (右塩田/左竹尾) 道

北方通り新道と成瀬、塩田通古道

此所にて、一所に成。

嬉野 シモシブ  
下宿

今村

嬉野宿 蓮の池領 塩田より式里半

宿内七八丁 入口豊玉姫明神社あり。

一、嬉野は茶の名所也。嬉野郷十二ヶ村あり。

皆茶によし。中にも不動村の茶を第一とす。」(39表)

茶店数々あり。

朝緑 一斤 銀式拾五匁より

春花 同 同三匁五分迄

十二三通りあり。

一、嬉野湯とて、名高き温泉あり。宿内より左の小路

を入、次第下りに川端谷合に行。両側旅宿ありて入

湯。人も入込居。当所の湯は、殊の外あつくして、

銘々水をうめ、程能加減にして入浴。夜中も不禁、

勝手に入。三枚敷位何通りも仕切てあり。しつひぜ

んによろしく、疝積は是に次。温泉直に下の川に流

れ落る。谷合霧の立ることし。流水の音至て高し。

予も此宿の泊に着と一度入浴し、又、臥前に入。未

明出立前、都合三度入湯。此所を嬉野郷湯の町とい

ふ由。

右側人 馬継所(高札の脇)小野原勘吉

本陣は深町六兵衛辻、左側也。脇本陣は糸荷や喜

兵衛とて、右側。蔵造り新宅也。又、造酒家いつ

みや蔵造り宅あり。

(小野原勘彦/差間二付)左側角(大和や源兵衛

泊)(39裏)

漸、当宿へ暮前に着。不用の品は右の小野原勘彦

方へ預け置。長崎へは不持込。

一、湯の町川を隔、東南に湯ノ嶽山あり。

一、三月朔日庚子 快晴無波

寅半刻嬉野出立

湯の田

大河内

下不動 店有

不動山 茶の名所随一の所也。

俵坂

此所山越也。嬉野より壱里半程之処。佐嘉候

より被建置候番所有之。丸に剣酸草の幕を張。

長崎へ罷越候段相改。夫より廿丁程行。

(従是北 佐嘉領/従是南 大村領)堺石建

坂本(40表)

猪の瀬 茶や三軒

大楠 猪の瀬道の左り折廻りに有。

昔、弘法大師杖を手づからさし玉ひしが、其杖より芽出て、かゝる大木の楠とはなりける由。廻り式拾四尋、上にしろの宿り木あり。近年中のうつろに成し所に、六都とり籠り居て、火を失し楠の木の中、大に焼たり。東向にうつろになりて、二三枚敷も空地出来たり。水戸赤水先生、長崎紀行にも記せし。道中第一の大木とは是也。

右山手に見ゆる。

彼杵村

道の右手に石の鳥居斗りあり。額に虚空蔵とあり。

峰村<sup>同断</sup> 日蓮宗 妙法寺 登に見ゆ。

彼杵 大村領 嬉野より三里

海辺也。入口大村侯御茶屋あり。

右御本陣、又、並びに大庄屋居宅。」(40裏)

左に脇本陣あり。行当り大高札場。

高札に

二月日 丹後(花押)

追分 右平戸道

左大村道 石建

左りに行は、人馬継所あり。大高札より海手に入込は船着也。彼杵は家員三百軒。

辰刻過彼杵本町

大高札の向 長門屋市右衛門にて休。彼杵家

員 三百軒 魚類多し。

此分先書の写 此筋通行せず。

一、当初より時津へ船路七里。時津より長崎へ陸三里也。長崎へ立越候者は、右渡海いたし候者多し。順風に候へは、半時にも着也。当所より大村へ五里。松原へ三里。いづれも便船あり。当所は入海。然も袋之中の如成海也。入海の口は数々追戸有之。何も狭きよし。両方の海辺は余程大村の御領分也。」(41表)

千綿<sup>チツ</sup>

江の口 左の山下に瀧あり。

をたるの瀧といふ。

六つ戸 海中に嶋あり。鹿嶋大明神社



松原 彼杵より三里

あいの宿 店数々有。

此所三十年以前迄は、人馬継候へ共、其後は人馬不継。彼杵より大村へ通す也。

櫛田ウシノ

氷川

氷村

右に大村侯 御茶屋見ゆる。

宮小路ミヤヤウジ 店数々

しのふぶし

つこの宿 又ほふこのしゆく共。

左側八丁程 桜馬場あり。

両方宿中の筋に桜ありとも。

くいでつ

八丁馬場といふ所あり。此村出口(41裏)

正文寺観音寺といふ寺有。前に馬建も有。

大村城下 彼杵より五里 松原より式里

肥前彼杵郡大村城主大村丹後守侯御城下にし

て、御高二万七千九百七十石余。

柳間 江戸より三百五十里

宿内十丁も可有之。彼杵より当所迄は、海岸

を行。絶景無類也。

大村家員千軒 大村領は五十丁一里ともいふ。

城下入口かご町・本町・檜荷町・袋町・片町・

裏町

片町より御城

本町に太神宮勸請

大村菩提所 日蓮宗 本経寺

一、宿内板橋あり。橋野手前より左に長崎道追分有。宿迎れ、一丁程に宮あり。石壇高し。一ヶ寺あり。小奇麗也。

一、大村御城小原の台より見ゆる、海辺に築出したる嶋山也。小路に旅人入間敷旨、札数々之。

(42表)

小原コハラ

此所に宮有。奇麗に掃除行届候様、相見候。

暫行はんとふ焼場あり。

す、田

此村内追々茶や数ヶ所有。

小松の宿 大村より一里半

あいの宿也。

猪野々峠

〈大村領／佐嘉領〉堺石

右御堺石より三四丁行、諫早よりの番所有之。  
諫早之内

永昌宿〈嶋原へ十一里／長崎へ七里〉

〈大村より三里／小松より一里半〉

此宿内不通往来。人馬継所、出張有之。此所より諫早近し。当所より河伯御守出る。

諫早

佐嘉侯長臣諫早豊前知行一万石の在所也。

諫早に近年大造の目鏡橋出来候由。長崎より

は、極大成橋の由。」(42裏)

貝津 店数々

九山 茶や数々

九山峠

〈佐嘉領／高木御代官所〉堺石

古賀村 御科所

此村内追々茶や有之。

〈高木支配所／佐嘉領〉 堺石

矢上 永昌より四里

宿内十丁余、左側人馬継所有。嶋原より長崎に越には、此宿内に出る。此宿出口番所有。

此間少しの峠有。

〈佐嘉領／高木支配所〉堺石

此所より左海廻にあばとといふ所有。

日見 矢上より壱里

宿内三丁も可有之。右側人馬継所有之。矢上より壱里と申候へとも壱里に近し。廿丁位なるべし。日見より長崎へ弍里と申候へとも、

近し。壱里半位。尤山越にて、石」(43表)

多く道悪敷登り坂壱里之間、大難所也。長崎

の人は西国の箱根と申伝し所也。矢上より長

崎迄は追々、茶屋あり。峠より長崎の方へ新

茶屋とて相懸の茶やあり。道筋長崎の墓所有

之。何も奇麗也。都て筑きたるは新らしき

墓所には不残家を作り、藁又は板にて屋根を

葺。死人を籠末に不致義尤肝要の事と存候。

長崎の手に別れの茶屋といふあり。同所より

参宮人等有之節、此所迄参り、酒宴をなし

暇乞いたし候也。ゆへに、別れの茶屋と申由。

彼杵より両士は大切の御使なれば、陸にて長崎へ通

行し、我輩三人は、今日天気合も宜事に付、船にて時津渡すべしとて、相別れ、彼杵船着より乗船す。船は五枚帆・式人乗。米は三斗三升俵」(43裏) 式拾石積(則六ノ十俵也)。乗合にて、忝人前船賃式百文宛拾五人乗合之積立。又、忝艘借り切なれば、金壹歩式朱之由。彼是乗合揃ひ已上刻出船少し沖に押し候所、西風強風のおひよろしく成。直に帆を巻候て、少しひらきにして船は、矢を射ることく、僅一時の間に時津にぞ着ける。時津へは海上七里と申候へ共、寔は十二里有之候由。十里以上は灘に立候ゆへ、七里と相宜候由承候。此海中大村領九島あり。

二島 三島

鹿島 多島 うそ嶋 寺島 め九嶋

此海手両方共、見渡申所は皆大村領の由にて、大村は二万七千石の御高といへど御内検は、十万石も有之候之由。大村候毎年九月御出立、御出府、翌四月、御暇百日の御在府、御登は中国路。御下りは、室津より御船也。又、彼杵より時津へは、北風真輶也。西風なればひらき、又、「(44表) 時津より彼杵へは南風

真輶とて東風はひらき也。

時津 大村領 彼杵より海上七里

家員式百軒

船着、船問屋有田屋、午刻過着。船昼食事仕舞。午

半刻直に出立。

宿迎れ、左に大村侯御茶屋・御蔵あり。

なめしの横道

右岩屋山大権現

浦上の岩屋

従是岩屋第権現

浦上岩や

従是北 大村領

従是南 高木作右衛門御代官所

城の腰

中野の辻

右に浦上の庄屋宅見ゆ。

浦上の小橋

平野の宿」(44裏)

時津道、馬込御船蔵の上御船頭屋敷。下通より西

坂より申刻長崎市中に入。豊後町にて休み、申半

刻桶屋町茶屋甚四郎方へ着。」(45表)

「(45裏)

此処に、長崎中の事

前々より聞及ひし事、且、此

節其地に到り、見聞せし

事委しく道の記草稿

に筆記せしかども、其後

寸暇なく取捨いまた清

書に及ばず。此度急々

仮編せしか、他日暇日

日をもつて書加へ、全備

の文ひとまきとなさんと

思ふのみ。

「(46表)

注記

本研究は JSPS 科研費 (課題番号 JP18K00323 研究者 代表 鈴木元) の成果の一部である。研